

御殿のインテリア

小粥祐子

④

公的空間 極彩色の格天井

皆さんは観光地などで古い建物を見学するとき、最初にどこを「眺」になるだろうか。筆者は天井を見上げる癖がある。その建物の意味を天井から読み取ろうとするためだ。

御殿は複数の建物で構成され、それぞれが廊下でつながっていた。これらの建物は儀礼・対面と住宅、つまり公的と私的の二つの機能に分かれていた。その違いが一目瞭然になるのが天井の装飾だ。

埼玉県川越市に「喜多院」という徳川將軍家ゆかりの寺がある。徳川家康の絶大な信頼を得ていた天海大僧正が法灯（最高位）の時に関東天台宗の本山となった。この喜多院客殿の天井は角材を格子状に組んだ格天井（かてん）になってい

て、81の格子の中（格間）にはめられた板には草花の絵が描かれている。

喜多院は寛永15（1638）年の川越大火で焼失した。その際、江戸城内の建物を移築したのが、現在の客殿である。とされている。81枚の天井板に描かれた草花は全て室内側に根、外に向かって花が咲き誇り、葉が伸びている。格子が重なりあう接続部には、彫金を施した金物が付いている。徳川家の家紋である三つ葉葵（あおい）が施されている。

御殿では、格天井は主人が家臣などと対面する公的建物に使われた。格間は絵で飾られた。江戸城の中で最も格式が高い本丸御殿大広間は、上段、中段、下段、二之間、三

之間、四之間、後之間とこれらを囲んで入側（廊下）があつて、いずれも格天井であつた。

さらに將軍が着座する上段は、「二重折上格天井」といって一段目の格天井の中央部をもう一段立ち上げて二重の格天井を造った。格間には幕府の御用絵師が描いた鳳凰や唐草を貼った。壁やふすまは金碧濃彩の絵で飾られており、部屋全体が権威空間にふさわしく極彩色に包まれているということになる。

一方、私的建物、つまり住居部分は「鏡天井」や「張付天井」と呼ばれる平坦な板に装飾を施した紙を貼った。現代の住宅と同じでシンプルな形だ。想像してみてもほしい。夜はともかく、朝起きて最初に目に入るものが極彩色の絵であつたら……目覚めは良いだろうか。（崇城大准教授）

毎週水曜日掲載